

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

平安期における小野小町享受

氏 名

服部 友香

論 文 内 容 の 要 旨

九世紀の女性歌人である小野小町は、『古今集』に十八首、『後撰集』に四首の歌を載せており、『古今集』仮名序の中では「近き世にその名聞こえたる」六人の歌人のひとりにも数えられている。しかしその事跡はほとんど記録に残っておらず、生没年や出自、宮仕えの有無、官職など、多くのことがわかっていない。そのような小町という存在、そして彼女の詠作を、平安期の人々はどのように享受してきたのか。

従来、平安期における小町の説話的なイメージが多分に反映されたテキストとして名前が挙げられてきたのが、小町の家集である『小町集』である。これは三十六人集の一に数えられるもので、115首以上の歌から構成される歌仙家集本系統(流布本系統の伝本は近世には版本として人口に膾炙した。その中には『古今集』『後撰集』の小町詠のみならず、『小町集』以外の平安期の資料には見いだせない、小町の真作か否かが不明な歌(「出所不明歌」)、『古今集』『後撰集』の詠人不知歌、そして明らかな他人歌が含まれている。しかしそれらは単なる他人歌の混入とはみなしがたいもので、『古今集』『後撰集』の小町歌と共通する題材や表現がみられるものが少なくない。『小町集』の編者が、意識的に小町らしい歌を増補して家集を構成していることが知られるのである。

本論の第一部では、この『小町集』の中でも1999年に公開された、冷泉家時雨亭蔵の唐草装飾本に着目する。『小町集』を小町の実際の事跡から切り離し、その増補に介在した小町の説話的イメージについて論じた片桐洋一氏は、『小町集』の成立を十世紀後半から十一世紀初頭と考えている。だが、歌仙家集本系統は十二世紀の後半以降に現行のかたちになったことが、その古態をとどめる承空本の注記や奥書から知られる。また資料の上に『小町集』や『小町集』を含んだ三十六人集についての言及があらわれてくるのも十二世紀以降のことである。だが、唐草装飾本については、『後撰集』の小町詠が一切見えず、『古今集』の小町詠と「出所不明歌」のみで構成されたも

のとなっている。

第一部の第一章では、この唐草装飾本が意識的に説話的な『後撰集』の歌を採歌しなかったわけではなく、『後撰集』所載の小町歌が流布する以前にその原本が成立した可能性について考察した。そして、唐草装飾本をはじめとする現存四系統、あるいは唐草装飾本以外の三系統に見える歌々を、比較的早い時代から小町と結びついて流布していた、『小町集』の「基幹部分」とみるべきことを指摘した。そして十一世紀にはこの「基幹部分」の歌々を集成した『小町集』が成立しており、『後拾遺集』初出歌人である能因法師や相模によって享受され、本が貸借されていたのではないかと述べた。

次に第二章では、『小町集』の段階的な成立を念頭に置いて、『小町集』に少なくない「あま(海人)」の歌について考察した。そして、『古今集』に二首存在する「あま」を詠んだ小町詠は自分に懸想する男を拒絶し、その熱意を揶揄するような趣があるが、『小町集』の「基幹部分」に見える「あま」の歌は、それらの歌の表現を踏襲しながらも、「あま」にたとえられた訪れてこない恋人を待ちわびていることを示した。そして歌仙家集本系統が独自に増補した「あま」の歌々になると、「あま」を相手の男の比喩ではなく出家した自分自身をたとえるものとして用い、出家遁世して海辺に閑居する女の姿を描いていることを指摘した。

そして第三章では、海辺ではなく「山里」を舞台とした歌が『小町集』に存することを取り上げ、従来は老年期の閑居する小町の詠として享受されてきたそれらの歌の中でも、唐草装飾本をはじめとする四系統すべてにみられる一首については、本来は山里で男を待つ小町の歌として『小町集』に収められた可能性を指摘した。そしてこの歌の存在から、平安中期の屏風絵や物語に描かれてきた、山里の女、廃屋の女、というイメージが小町像に影響を及ぼしていたのではないかと述べた。『小町集』を形成段階に沿ってみてゆくことで、その時代時代に特有の小町のイメージが浮かび上がってくるのだが、物語文学が隆盛をみせた十一世紀ごろに小町に結び付けられた歌々は、「来ぬ男を待つ女」の歌として解釈しうるものであり、『源氏物語』などの物語に登場する女君の姿とも共通するところがあることが明らかとなった。

次に第二部の第一章では、小町の歌が実際に物語の中でどのように利用されているのかを探るために『住吉物語』を取り上げた。この物語は継子譚で、継母の仕打ちに耐えかねた姫君は出奔し、住吉の海辺に身を隠す。そして彼女をたずねてきた男君と再会し、都に迎えとられることとなるのである。本章ではこの物語に引かれた三例の『古今集』や『後撰集』の小町歌がいずれも姫君が流離の身の上であるさいに作中に登場していることを示し、中でも姫君が帰京するさいにその船を送る遊女たちによってうたわれた『後撰集』に小町の作として載る歌「心からうきたる舟にのりそめて一日も波にぬれぬ日ぞなき」という歌がどのような機能を担わされているのかという問題や、小町詠が作品に結び付けられた時代についても考察した。

最後に第二部第二章では、小町を主人公とした説話の中でも、十二世紀の初頭ごろから語られるようになった鬮體説話、すなわち小町が死後に野ざらしとなって「あなめ」という特異な語を含む歌をうたい、その声を聞きつけた人物に供養されるという話の変遷を追った。この鬮體説話の中でも、『小町集』や大江匡房の『江家次第』に伝えられているものには「恋人との再会」という要素が含まれている。そして『江家次第』には、十一世紀の物語に少なくない「亡くなった恋人の最期の地や遺骸を求める」という要素が導入され、業平の心の深さや彼との再会によって救済される小町の姿が描かれるが、時代が下るにつれて恋の要素は後景化し、仏教的な性格を帯びた小町の老衰と零落を語る説話の延長上に位置付けられてゆくことを確認した。

以上のように『小町集』をはじめとした資料にあらわれている平安期の小町享受の諸相を見てゆき、小町の伝記の空白を埋めるこの時代の人々の想像力と、時代の経過によって引き起こされたその変化について考察を加えた。



